

---

# 私はこうして『見える人』になった～『生と死の狭間に』改題～

山本哲也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私はこうして『視える人』になつた　『生と死の狭間に』改題

### 【Nコード】

N2219C

### 【作者名】

山本哲也

### 【あらすじ】

夏休み、久しぶりに実家に帰ってきた朝宮さゆりの目の前に、突如落ちてきた冴えないオッサン。どー見ても死んでるんだけど、その彼が突然起きあがった！どーなってるの！？と驚いているさゆりの前に現れた、謎の高校生（推定）。彼によれば、「実際のその人はとうの昔に死んでいて、今さゆりが見ているのは幽霊」なんだって！？霊感ゼロのハズだったさゆりが、突然霊能力に目覚めちゃったワケ！？一体、どーなっちゃってるの！？

最後に一つ大きく揺れると、電車が止まった。

それまでいい気持ちで眠っていた朝宮さゆりは、そのせいでしたかに手すりに頭をぶつけ、目を覚ます。そして、暫く運転席に向かつて小声で悪態をつきながら頭を抱えて痛みをこらえていたが、やがてそこが自分の降りる駅だったことに気がつく、あわてて電車を飛び出した。

間一髪、閉まる扉の間をすり抜けて。

「ふー…危ないトコだった…」

そう呟きながら、手の甲で額の汗をぬぐう。駅舎が複雑に入り組んでいる上に駅ビルまで建っているせいか、ギラギラと照りつける夏の日差しがホームにまで届くことはないが、それでも辺りの空気はむわっと暑く、圧迫感さえ感じられる程だ。歩いていると何だか固体の中を進んでいるような気分になんてきてしまう。だからといって立ち止まってみても何かが変わるわけでもなく、すぐにじっとりと汗が滲じんでできてしまうだけ。

(要するに、救いたい暑さなワケだ)

一人納得すると、さゆりは手でぱたぱたと扇あおぎながら(これは全くの気休めにすぎない)辺りを見回し、

「相変わらずこっちは暑いわねー。やっぱり帰ってこなきゃ良かったかな…」

と、ひとり呟く。

さゆりは現在、長野の大学の二年生。さすがに東京の実家からでは通えないので向こうで気ままな一人暮らしをしているのだが、向こうのひなびた『いかにも田舎の駅でございっ!』という駅と実家の最寄りの駅とは十度くらいは気温が違う気がする。特急を使えばせいぜい一時間半ほどなのに、だ。大体、向こうでは風が吹けばそれなりに涼しいが、こっちでは吹いてくる風すら『生暖かい』を

通り越して熱風だった。これには納得がいかない。夏に吹く風はたとえわずかばかりでも涼を運んでくるべきもので、余計不快にくれるものでは断じてないハズだ。さゆりは心の中でそう言いきると、

（なつてないっ！）

と風をなじった。外向きにカールした髪型、白のブラウスに七分丈のズボン、そしてサンダル。荷物といえば肩にかけたトートバックのみ、といういでたちのさゆりはその外見通り（そして「さゆり」という大人しそうな名前とは裏腹に）、非常に活発かつわがま……いや、えー、主張がハツキリしているのだ。

それにしても、こちらの風景の変わり様はめまぐるしい。前に帰ってきたのが春休みだったから、ほんの数ヶ月しか経っていないはずなのに駅の様子がすっかり変わっている。

何しろ、以前はなかったはずの駅ビルが目の前にでんっ！ と聳え立っているのだ。生まれてから十八で大学に入学するまでの間ずっと住んでいたはずの街なのに、どこか異境に来てしまったような錯覚さえ覚える。

（あつっ）。まあいいや、また明日にでも来よ）

駅ビルに寄ってみようかとちらつと考えたが、この暑さで何だかゲンナリしてしまい、そのまま家に帰ることにした。駅前の探検は昔なじみを呼び出して案内させながらの方が勝手がいいだろう。昔なじみの顔を思い浮かべ、頭の中のスケジュール帳に明日以降の予定を勝手に書きつつ、さゆりは歩き出した。

それから十五分ほど後。さゆりは一人怒っていた。

「なつてないっ！！」

半ば口癖になつている台詞を呟き、道ばたに転がっている小石を蹴飛ばしてみたりする。駅ビルが出来たり、駅前のビルと駅を直接結ぶ地下通路が出来ていたりで駅の構造がやたら複雑になっていたため、延々地下通路を歩かされたあげく全く見当違いの場所に出て

しまったのだ。所々工事中でロクな案内表示もないのでまさに開けてビックリ状態だった。これからまた地下通路を戻るのも癪に障るし、そのままブラブラと店でも見ながら戻るつもりで歩き出す。それにしても、いつの間にかこれだけ…と妙に感心してしまうほどの変わりようだ。大通りが整備され、駅周辺に高いビルがいくつも建ち並び、ついでに小じやれた喫茶店やいろいろな店が軒を連ねている。確か、春休みに帰った頃には細い古い道の周りに古ぼけた商店が建ち並び、ついでに道ばたに古めかしいお地藏さんまであるという寂れた街だったのだが…。たった数ヶ月でここまで変わってしまうワケ？ それ为建设会社や鉄道会社の實力だとしたら、学校周辺の街並みがいつまで経っても変わらないってのはヤツラがサボってるせい？ 等と考えてしまいたくなる。

(そだ、ついでに誰か呼び出して駅前探検と行こうかな？)

はたと気がつき、立ち止まって鞆の中からアドレス帳を…と、ガサゴソやっているところで、

「どしゃっ!!!」

という音と共に目の前に何か黒っぽいものが落ちてきた。

それは、一見すると『濃いグレーの背広を着た冴えないオッサンのマネキン』のようで、よくよく見てみるとやっぱり人間だった。ただ、人間にはあり得ないような曲がり方をした関節や、妙な具合にひしゃげた頭が不思議とリアリティを消してしまい、人形のように見えたのだ。

(ああ、そうか…この人、飛び降りたんだ)

不思議に心が落ち着いていて、さゆりは左手側に聳えているビルを見上げる。そのビルは一階が貴金属店になっており、上の方は事務所でも入っているのだろうか、十二、三階ぐらいはありそうだ。

(…え？ じゃあやっぱりこの人…)

状況を理解して行くにつれてじわじわと恐怖感が身体を這い上っていきのがわかった。それと同時に身体がガタガタと震えていく。悲鳴を上げたくとも、舌が張り付いてしまったようになっていて声

も出ないのだ。目を見開き、震えたまま立ち尽くすさゆり。

「あの…だ、大丈夫ですか？」

と、突然背後から声をかけられ、さゆりは飛び上がって驚いた。振り向くと、高校生だろうか、さゆりより少し背の低い、中肉の人の良さそうな制服姿の男の子が立っている。顔の、どこかぼんやりしたようなぼよーっとした特徴のないつくりに比べて、やたらに長い耳たぶばかりが目立っている。こういうのを福耳というのだろうか。後で顔を思い出そうとしても耳たぶは思い出せてもどんな顔をしていたかは思い出せないだろう。

（なんだかお地藏さんの耳みたい…）

さゆりはふとそう思う。そのせいなのか、はたまた突然声をかけられて驚いたせいで呪縛が解けたのか、それとも（少なくとも死体よりは）自分の見慣れたものの出現で緊張が解けたのか、いつの間にか震えは治まっていた。さゆりはその代わりに（お礼というわけではないし、もしそうだと信じてはくれないだろうが）、

「大丈夫どころか心臓が止まるかと思ったじゃないの！ ホントに止まっちゃったらどうしてくれるのよ！！」

と食ってかかる。相手の高校生はこの理不尽な怒りに対して

「あ、す、すみません、脅かすつもりはなかったんですが…」

と元々笑ったような作りの顔を精一杯すまなそうにして平謝りに謝る。

「当ったり前よ！！ 大体ねえ…」

相手の腰の低い態度がますますさゆりを調子づかせる。

だが、それも長くは続かなかった。

あろう事か、先ほどの死体がむくりと起きあがったのだ。

「ひ…」

目を見開いて声も出ないさゆりに、

「あ…だ、大丈夫ですよ、彼、もうとつくの昔に死んでますから

…」

と、例の福耳君が遠慮がちに言った。

何か悩みでもあるのか、それともこの暑さで脳が溶けてしまったのかは知らないが、ぼんやりした、死んだ魚のような目をしたウエイトレスがやってきて、アイスティーとミルクティーを二つとも、福耳君の方に置くこととする。カチンと来たさゆりが何か言おうとする前に、あわてて福耳君がアイスティーは『あちらへ』と手振り以示すと、ウエイトレスはめんどくさそうというか、怪訝けげんな、と言わねばか、ボケーンとした表情なのでどちらともつかないが、とにかくアイスティーをテーブルの上をズズーツと移動させてさゆりの前に置く。さゆりは相手をキツと睨みつけながら置いていったアイスティーをひつつかむように取ると、ストローも使わずにゴクゴクと一息に飲み干した。残念ながら、さゆりの無言の抗議は功を奏さなかったようで、そのぼんやりウエイトレスは伝票を置くとそそくさと戻って行ってしまった。

「なつてないっ!!」

その後ろ姿を睨みながら忌々しげに言うさゆりを、まあまあと福耳君がなだめた。

あれから、福耳君曰いわくいろいろご説明しますから、と一言することで、すぐ近くの喫茶店に来ていたのだ。

「…あの…」

何か物言いたげな福耳君は無視して、さゆりは喉の渇きという生理的欲求を満たすことに専念した。怒りにまかせて一息に飲んでしまったアイスティーのグラスを置き、ちらりと水のグラスに目をやる。それは、入店早々に飲んでしまったのでとつくに空だった。

「これ、飲んでないよね？」

「あ、ええ…?」

福耳君が答える間もなく、さゆりは福耳君の分の水のグラスを取ると、そちらも一息に流し込む。

「…ふー」

「…あの、落ち着きました?」

よつやくさゆりの表情が和らいだのを見て、例の福耳君がおずと声をかけてくる。その相手の顔をジロリと睨んでさゆりは答えた。

「ま、何とかね…」

「そうですね、良かったー」

途端に福耳君の表情がぱっと明るくなる。

「ぜんっぜん良くないわよ、一体何なのアレ!？」

机をだんつと叩いてそう叫びながら、さゆりは窓の外の景色を指差す。喫茶店は先ほどオツサンが落ちてきた場所とはちょうど大通りを挟んで反対側にあり、窓の外では五分おきぐらいの間隔でオツサンが落ちてきて、また起きあがってビルに入っ…という情景が繰り返されていたのだ。

「大体どーしてあんなのがよく見える場所なんか選ぶのよ!？」

「いや、その…実際に見ていただいた方が理解しやすいかと…」

肉付きの良い身体を精一杯縮めて福耳君が答える。その様子に、さゆりは何だか毒気を抜かれてしまった気がした。

「…ふ」

さゆりは一つ溜息をついてソファアに座り直すと、

「で？ 何を説明してくれるワケ？」

と続ける。福耳君の表情が再びぱっと明るくなった。

「ええ、あの…、一体何から説明していいものか…」

福耳君はなにやら困っている様子でもじもじしている。その様子が非常に腹立たしく、さゆりは

「やつぱいいい。帰る」

と言って立ち上がり、すたすたと歩き始めようとする。そのさゆりのブラウスの裾をつかんで福耳君が引き留め、あわてて説明を始める。

「で、てすから、その…、何というか、あれは…要するに、霊とか幽霊と呼ばれるものなんです…って、聞いてくださいよ」

最後の方は聞いていると情けなくなってくるような哀れな声だ。



さゆりは仕方なく席に戻った。思いつきり胡散臭つまぐさそうな顔をしながら。

「霊とか幽霊というと大抵の方は胡散臭つまぐさそうな顔されるんですけど、他に言いようがないんですよ」

その表情を見てか、福耳君が泣きそうな声で言った。

「…いいから、さっさと説明して。聞くだけ聞くから」

さゆりは手でしっしつとやりながら促うながす。

「ですから…」

そう言いかけた福耳君は急に口をつぐんでしまふ。そして、それから暫くしてから、俯いて消え入りそんな声で

「…いい、以上です」

と言った。

これにはキレた。

「ちよつとアンタ、バカにしてるわけ？ 今の説明！？」あれは…要するに、霊とか幽霊と呼ばれるものなんです？ 『冗談じゃないわよ。何の説明にもなって無いじゃない。それにね、言っとくケド、あたし、靈感とかそういうのぜんっぜんないんだからね、見えるワケないじゃない！！』

「ですから、それは…時には急に靈感が発達して見えるようになることもあるんですよ」

何だかとてもいいわけがましい答えに、さゆりは即座に答えた。

「証拠見せて」

「いや、証拠つて言われましても…」

「ほら見なさい、アンタね、人をバカにすんのもたいがい…」  
そこまで言いかけたところで、不意に窓の方から異様な気配を感じ口をつぐむ。気がつくくと、さっきまで困り切ったような顔をしていた福耳君の表情も今までと違って緊張している。

（振り向いても平気？）

さっきまで散々文句を言っていたにもかかわらず、アイコンタクトで福耳君に指示を求める。さゆりの勘が、そうしると警告を出し

ていたのだ。

（大丈夫です。ただし、ゆっくりと。それから、声など出さないように）

その意を察してか、福耳君がアイコンタクトとゼスチャー（人差し指を唇に当てる例のヤツ）で返す。さゆりは『了解』の意を伝えるため一つ大きく、ただしゆっくりと頷くと、ゼンマイの切れかけた人形のようにゆっくりと、ぎこちなく窓の方へ頭を向ける。

と、そこには辛うじて人型と判別できるほど形の崩れた、真っ黒に炭化したものが窓にびったりと張り付いて福耳君の方を見つめていた。不思議なことに頭らしき炭の固まりについているぎよろりとした血走った目だけは生きている人間の目よりずっと生々しく、そして狂気に満ちている。

「ひ…」

思わず上げそうになった悲鳴を懸命に飲み込む。だが、それを聞きつけたのか、不意に炭の固まりのあちこちがぱっくりとさけて血走った目がいくつも開き、きよろきよろと辺りを見回している。

「何でもない。おまえには関係のないことだ。この場から離れなさい」

さつきまでの優柔不断な様子とはうって変わって、福耳君が相手の目（？）をしっかりと見据え、きっぱりとした調子で告げる。

「行きなさい」

福耳君がもう一度言うと、その不気味なものは渋々という感じで去っていく。それがずいぶん遠くに行ったのを確認してから、さゆりはようやく息を吐いた。それまで、ずっと呼吸を止めていたのだ。

「だ、大丈夫ですか？」

また元のおどした調子に戻った福耳君が尋ねる。さゆりは無言のまま頷いた。

「…で、どうして急に見えたりするようになるワケ？」

先ほどまでの調子を百八十度変えて、さゆりが尋ねる。

「信じてくれるんですか!？」

福耳君が素つ頓狂な声をあげた。

「…だって、ねえ…アレを見ちゃ、信じないわけにいかないでしょ。プラズマじゃ説明できそうにもないし、幻覚見るような覚えもないし。それとも疲れてんのかな…もしかしてアタシまだ電車に乗ってて、これは夢だとか…」

「あ、あのー…」

途中から投げやりな調子になっていくさゆりに福耳君が遠慮がちに声をかける。

「いいわよ、分かったわよ。信じる。信じるから、説明続けて。今のは一体何？ それから、どうしてさっきの人は飛び降り続けるんの？」

片手でしゅしゅとやり、もう片手で疲れたように目頭を押さえながらさゆりはそう尋ねた。

「…はあ…」

自信なさげに俯き、ぼそぼそと消え入りそうな声で福耳君が話し出す。

「あの、今は、ずっと昔、戦争中に空襲で亡くなった方の…霊…それも』どうして自分が』って恨みながら亡くなった方の…を核として、他の、似たような思いを抱いて亡くなった方の…その…霊…が」

「信じるから。言いたいこと言っちゃってよ」

目をつぶったままさゆりが言った。福耳君の説明はいつも『霊』と言う単語のところでも声が消え入りそうに小さくなり、言い辛そうにどもるのだ。まるでHな単語を無理矢理言わされ、恥ずかしがっている少女のようだ。

「はあ…その…霊が、長い間に集まって、一つの集合体のようになつた、いわば怨霊、です」

そういわれて、何となく納得できることもあった。あの、ひしひしと伝わってくる重苦しさはまさに『敵意』そのものだったからだ。

「…じゃ、アレ、は？」

そう言いながらさゆりは窓の外を顎でしゃくる。その先では、相変わらず先ほどのオッサンが何度も『ロープのないバンジージャンプ』をしているのだ。

「どうしてああやって何度も飛び降りてるワケ？」

「それは、ただもう『死にたい』っていう想いが強すぎて『自分が死んだ』ってことが分からなくて、ずっと死に続けてるんです。言ってみればビデオがエンドレスで回っているみたいなので、テープの終わり…つまり、死んだ時までくると再び死ぬためにビルに入っていく所に巻き戻されて…」

「…ふーん。じゃ、アレは？」

さゆりはそう言って近くの交差点を指差す。そこには半分顔がなくなつた若い女の人が、他の人たちに混じって信号を待っていた。まるで生きている時のように。

「あれは…事故で亡くなつた方でしょうね。突発的な事故で、即死だったりすると自分が死んでいるのが分からないままずっと生きていた時の生活を続ける事があるんです」

「…ずっと、あのままなの？」

信号が青に変わって歩き出した人々と、それに混じって歩き出す半分だけの顔の幽霊を見つめながら、ぽつりとさゆりが呟いた。何だか可哀想だつたのだ。

「…いつか、自分が死んでいることに気づくまでは…」

それに答える福耳君の調子も、やはり寂しそうだった。

「…それって、いつ？」

「さあ…それについては僕も何とも…いくらも経たないうちに気がつくこともあるし、いつまで経っても気がつかないこともあるし…まさに、神のみぞ知るっていうところでしょうかねえ…」

何とも歯切れの悪い答えだ。だが、福耳君を責める気にはならなかった。そう答える声の調子に、さゆり以上に彼がやり切れない思いを抱いていることがひしひしと伝わってきたからだだった。

「…可哀想だね…」

また起きあがってビルに入っていくオッサンを見つめながら、さゆりがぼつりと呟く。

「…はい…」

暫く、二人とも無言で窓の外の風景を眺めていた。そこにはさゆりが今まで見慣れていた風景 暑そうに顔をしかめながら歩いていくサラリーマン、楽しそうに話しながら歩いている女子高生達…といった、生きている人間達の風景 と、見たことの無かった風景 横断歩道の辺りに佇む血まみれの人や、誰かの後について心配そうに見守っているおじいさんやおばあさん、ただふらふらとさまよっている半透明の人達 が重なっていた。

（知らないところでこんな世界が広がってるなんて、一度も考えたことなかった…）

さゆりは合成したフィルムでも見ているような気がした。だが、単なる合成と違うのは、生と死の狭間で、その一人一人が、悲しみや怒り、無念さなど様々な想いを抱いていることだった。

「…アンタもこんな風に突然見えるようになったワケ？」

不意に、さゆりがぼつりと呟く。

「はあ、まあ…。最初は、色々ありますけどね。慣れてしまえば…」

後の方の言葉は、さゆりを慰めようとしているものらしい。だが、さゆりはそれには応えずに黙って外を眺めていた。

再び、沈黙が流れる。

不意に、さゆりが福耳君の方に向き直り、言った。

「ね、ちよつと手伝ってよ！」

店を出たさゆりはおろおろしている福耳君を（半ば強引に）引き連れて、先ほどの飛び降りオッサンの所へ戻った。

暫く脇でじつと見ていると、オッサンはさつきからずつと

落ちて つぶれて 起きあがって ビルの階段を上がって 落ちて という行動を繰り返し返している。落ちてくる場所も、血の出方も、

背広（このオッサンの着ている物はさゆりとしては『スーツ』と呼びたくなかった）のはためき方まで一緒だ。

まさに、ビデオのエンドレス再生のようだった。

「あの…ど、どうしたんですか？」

じつと飛び降りオッサンの様子を見つめているさゆりに、福耳君が遠慮がちに声をかけてくる。さゆりはそれを片手を挙げて制すると、一つ深呼吸をした。いくらそれがとうに死んだ人間の霊といえ、血まみれのぐちゃぐちゃに潰れた顔を間近で見るのは心臓に悪い。

「ねえちよつと聞きなさいよ、ねえつてばっ！！」

「あなた、もうとつくに死んでるのよ！？ これ以上死ぬ必要なんてないのー！！」

「死んでるんだつてばっ！！」

オッサンの前から、後ろから、果ては耳のすぐ側で叫んでみても反応はない。

全く何も見えない&聞こえていないようなのだ。

「聞けつてんだよ、この」

そう言いながら思いっきり殴りかかるが、オッサンにクリティカルヒット！ するはずだった拳はそのままそこに何も存在していないかのようにオッサンの身体を突き抜けてしまう。

「わつとつと」

勢い余ってバランスを崩しかけたさゆりを、福耳君があわてて支えた。

「だ、大丈夫ですか？」

「ふー。ダメだこりゃ。立体映像に話しかけてるみたい」

階段を上がっていくオッサンの後ろ姿を見送りながら、さゆりは溜息をつく。面白いことに一度はつぶれてしまったオッサンの顔は、階段に足をかける頃には元通りに戻ってしまっていた。こちらはどつというこのない、痩せた、冴えない銀縁の眼鏡をかけた神経質そうなしよぼくれたオッサンの顔そのもので、インパクトとしては先ほどの血まみれの時の方がはるかにあるだろう。仕事や宴会芸に

は向かないとは思うが。

オッサンの後ろ姿を見送りながら考え込んでいる様子のさゆりに、福耳君が遠慮がちに声をかけてくる。

「…だから、時が来るまではダメなんですよ…あの人の時間はあの時で止まってしまってるんですか…あがががーっ！」

最後の『あがががーっ！』は別に怪獣の叫び声ではなく、さゆりが福耳君の口に指を突っ込んでぐいぐいと広げたための悲鳴だ。

「うるさいわね、アタシはそーというのが嫌いなの！！」

そう言うなり階段にどっかりと胡座をかいて座り込み、頬杖をついて考え込むさゆり。

こんな事で諦めたくなんかない。自分でも余計なお節介だとは思うが、なんとしてでも、どうにかするのだ。じゃなきゃ寝覚めが悪いにきまつてる。

コツ…コツ…と階段の上の方から響いてくる足音を聞きながら、じっと考え込む。

一体、どうすれば？

だが特にどうという考えが浮かんでは来なかった。

大体、情報が少なすぎるのだ。それというのも、『時が来るまで…』等と言って呑気のんきに構えているヤツが悪いのだ。

さゆりは側でぼんやりしている福耳君をジロリと睨んだ。

「す…すみません…」

と、その視線に気づいたのかそれともさゆりの心の中が分かるのか、福耳君が肉付きのいい身体を精一杯縮めて謝る。

と、唐突にさゆりが立ち上がった。

「ひっ！…ご、ごめんなさい〜」

と、早くも条件反射が出来てしまったのか、福耳君が手を挙げて頭かばを庇う。

…失礼な。

その様子を、さゆりは冷ややかな目で見つめている。

「…あ…ご、ごめんな…ひーっ！…」

「何でそうあからさまに怯えられなきゃならないのよっ！」  
そう言いながら、さゆりは福耳君の頭をつかんで拳骨でグリグリとやった。

まったく、こんな大人しい人間に怯えるなんて失礼な話だ。

しかし、いつまでもそうしているわけにはいかない。さゆりは

「行くわよ！」

と言って福耳君の腕を掴むと、階段を駆け上り始める。

「うわわっ！ あのっ！！ ちよっとっ！！」

「ちゃんとついてこないと怪我するわよ！」

引つ張られて転げそうになっている福耳君に向かってそう怒鳴るさゆり。心の中では

(まったく、なってないっ!!!)

と言うお決まりの台詞を呟いていた。

ビルの階段の行き着く先がいくつもあるわけがないので(『天国』とか『地獄』というのがあるとしたら別かもしれないが)、もちろん、行き着く先はオッサンも、さゆり達も一緒。そして、飛び降りといったら屋上からと相場は決まっている…ハズだ。

と言うことで屋上まで一気に駆け上ったが、果たして屋上へと通じるドアを開けると、屋上の端へとぼとぼと歩いていくオッサンのしょぼくれた背中が見えた。実に全く『しょぼくれた背中』というものを形にしたらまさに今見ている物になるのではないかと言うほど立派にしょぼくれている。まあこれから自殺しようというヤツの背中が堂々として見えるとは思えないが。

それにしても。

(まったくあの役立たず、一体何もたもたしてんのよっ!)

とぼとぼと一歩ずつ屋上の端へと向かっているしょぼくれた背中と、下の階から途切れ途切れに聞こえてくる足音に代わる代わる注意を向けながらさゆりはジリジリと待った。途中の階で息切れして付いて来られなくなった福耳君を置いてきたのだが、いつまで経っ



てもたどり着く様子がない。さっきの喫茶店の時のように何かしら役に立つかもしれないのに。

こうしている間にもしよぼくれた背中はどんどん端へと近づいている。このままでは間に合わないかもしれない。尤も、放つとけばまた上がってくるのだから、やはり自分の目の前で人が飛び降りようとしているのをただ黙って見ているのはさゆりの性に合わないのだ。

「なつてないんだからっ！！」

舌打ちしながらそう言くと、さゆりはしよぼくれた背中に向かつて駆けだし、追いついたところで再び説得を試みる。

「聞けっ！！ ころっ！！ アンタはもう死んでるんだってばっ！」

「聞けつてんだよっ！ この ！ ！！ ！！！」

さゆりは思いつく限りの悪態をつく。もう滅茶苦茶だ。ちなみに、その後の『 』はうら若き乙女（自称）の台詞としては不適當と思われるので伏せ字にさせていただく。適当に想像して欲しい。

そうこうしている間にもしよぼくれた背中はどうとう屋上の端にたどり着いていた。彼は腰ほどの高さの柵に手をかけ、じっと街を見つめている。その様子に、胸が締め付けられるような思いがしてさゆりは黙ってしまった。

それから彼は背広の内ポケットから白い封筒を取り出すと、靴をきちんとそろえて脱いでその上にそつと封筒を乗せた。

もちろん、その封筒には『遺書』と書かれている。

さらに続けて彼が内ポケットから取り出したのは、一枚の写真だった。どうやら彼の家族の写真のようで、彼と、その隣に奥さんらしいやはり神経質そうな女の人。そしてその二人の真ん中に、二人のどちらにも似ているような、似ていないような制服姿の女の子。暫くその写真をじつと見つめていた、寂しそうな銀縁眼鏡の奥の目から、つ、と涙が伝う。そして、名残惜しげに見つめながら遺書の上はその写真を乗せると、

「…ごめんな…」

そう、そつと呟く。

それからおもむろに柵を乗り越え

「待って!!」

思わず、さゆりは身を乗り出して抱き留め ようとした。

だがその腕は空を切るばかり。熱くなって、彼にはすでに実体がない事をすっかり忘れていたのだ。

(しまっ…)

そう思う間もなかった。バランスを崩した身体はそのまま前にめって一回転してしまい、柵の外へ

時間が妙にゆっくりと過ぎていき、まるでスローモーションのようだった。そして、辺りの音がすうつと遠ざかり、そのまま身体が真っ青な空に吸い込まれていくような感じがする。そして、下へと落下していく…。

デジャブのような感じを覚えながら、さゆりはそのまま下へ、下へ…。

「危ないじゃないか!!」

ガクンツ、と不意に身体の動きが止まり、ビルの壁にしたたかに打ちつけられた。

「くっ…」

「大丈夫か、しっかりしろ!!」

全身を襲う痛みには耐えていると、力強い手が身体を引っ張り上げてくれるのを感じた。

福耳君だろう。全く、今までずっと何やってたんだか、おかげでこんな痛い思いまでして…と思いつつうっすらと目を開ける。

と、そこにいたのは他でもない、さっきの飛び降りようとしていたオッサンだった。先程までのしょぼくれた様子は影を潜め、今は自信と、力強さに満ちている。

「…よかった…アタシのこと、分かるのね…」

引っ張り上げられ、暖かな身体が抱きかかえてくれるのを感じな

がら、さゆりは全身から力がふうつと抜けていくのを感じていた。

「おいっ！！　しっかりしろっ！」

「だ、大丈夫ですか!？」

半ば抱きかかえられるようにしてさゆりが柵の内側に引っ張り込まれている間に、ようやく、福耳君が追いついてきた。こういうのをまさにおっとり刀で、と言うのだろう。だが、今のさゆりにはそれをどうこうするだけの気力もない。まずは、このオッサンに自分が死んでいることを分からせなければ。

「君、大丈夫かね？」

オッサンが尋ねてくる。しょぼくれた様子はもうなかった。しっかりとした大人の声だった。

「…大丈夫…。ところで…あなた、アタシのコト分かるのね？」

「何を言ってるんだ？　君は？　今、救急車呼ぶから大人しくしていなさい。もう変な気を起こすんじゃないぞ」

怪訝そうな声でオッサンが答え、そつとさゆりの身体を支えていた手を離す。こんな所に電話が設置しているはずもないので、電話のあるところまで行くつもりなのだろう。その古めかしい格好からしても、彼の生きていた時代に携帯電話があったとは思えない。何しろ、さゆりだってまだ実物を持んだことがないのだから。

「あなた、自殺するつもりだったんでしょ？」

さゆりがそう尋ねると、オッサンの動きがぴたりと止まった。

そして、そのまま暫し沈黙が辺りを支配する。

「…き、君には関係ないことだ」

ややあつてそう答えたオッサンの声は、上ずっている。

「大ありなの」

相手の反論を封じるようにぴしゃりと答え、それから一つ深呼吸して続けた。

「…あなた、もうとっくに死んでるのよ。もうこれ以上、自殺しようとする必要なんて無いの」

「バカな、何を言ってるんだ君は？　私のどこが死んでいると言

うんだ？ 身体だってある、血も通ってる。とにかくじっとしていなさい、今……」

「こつすればすぐ分かるはずよ！」

そう言いながらさゆりは相手の腹めがけて拳を繰り出す。

ドカツ！！

「ぐお……」

さゆりの予定では相手の身体を突き抜けるはずだったそれは、オッサンの鳩尾みそおちにクリティカルヒット！ オッサンは苦しそうにうめきながらその場に頽くずれる……。

「あ、あの、相手がこちらの存在を認識したら、相手にとって存在するものとなるわけで、つまり……」

キョトンとした表情でかがみ込んでいるオッサンと自分の拳を交互に見つめているさゆりに、遠慮がちに福耳君が言った。

「そ、そう言うことは早く言いなさいよ！！ アンタって人は全くなつてない……」

真っ赤な顔をして福耳君に食ってかかるさゆりを、

「き、君は一体何を考えて……」

とオッサンが睨みつける。

「いや、その、ご、ごめんなさい、そういうハズじゃ……」

無かったんです、と言っても信じてもらえないだろうなあ、と思いつつ、謝ろうとするさゆりを制して福耳君が胸ポケットから取り出した何かをオッサンに見せた。

「これをご覧ください」

横からのぞき込むと、それは大人の手のひらほどの大きさの丸い鏡のようだった。さすがに、この位置からでは反射してしまっただけが映っているのかまでは分からない。

「……う、嘘だ……」

オッサンはそう言いながらも鏡に釘付けになってしまっている。

身体が、そして声が、震えていた。一体、何が見えているというのだろう。気になって仕方がなかったが、さゆりの位置からではよく

分からなかった。

「下の地面で横たわっているあなた自身が見えるでしょうか？ この人の言う通りなんです。あなたはもうずっと以前に亡くなってるんですよ」

きつぱりとした態度で、福耳君が答え、続ける。

「その柵から下をのぞいてご覧なさい。同じものが見えますよ」

「…う、嘘だ…そんなはずは…」

そう言いながらもオッサンは這うようにして柵の所まで行き、恐る恐る、遙か下の地面をのぞき込む。

「…！」

オッサンが息を呑むのが分かった。

「…お分かりですか？ あなたは、もう十年以上前にここから飛び降り自殺されたんです」

目を見開き、真っ青な顔でこちらを見たオッサンに、言い聞かせるように福耳君が告げる。

「…そんな…そんな…」

オッサンは、頭を抱えて泣き出した。

暫く経つと、落ち着いてきたのだろうか、オッサンが顔を上げる。その顔は泣き濡れてはいたが晴れ晴れとしたものだった。

「…申し訳ない。失態をお見せして…」

眼鏡を外し、涙をぬぐいながらオッサンが決まり悪そうに謝るのに、福耳君がにこやかに微笑んで答えた。

「いえ、それでいいんですよ。胸につかえているものを解放してしまわないと」

「あの、それで…ご迷惑ついでに伺いたいが…」

オッサンは、そう言いながら言いにくそうに俯く。

「何でしょう？」

「…家内や娘は…今どうしているかご存じですか？」

それを聞いて、福耳君はまるで予期していたかのように微笑んで

頷いた。

「…はい。どちらも昔と同じ場所で、元気に暮らしておられます。娘さんは今年結婚なさるはずですよ」

どこから取り出したのか、小さな黒い手帳を見ながら福耳君が答える。

「…そうですね…」

そう呟きながら、オッサンはどこか遠くを見つめていた。きっと家族の、そして成人した娘の姿を思い描いているのだろう。

「まだ昔のご住所は覚えていらっしやいます？ お忘れでしたらここにありますが…。ご自分で、見てこられては？」

福耳君が、手帳をひらひらと振りながら悪戯っぽく微笑む。

「そんなことが出来るんですか!？」

驚きと喜びの入り交じった顔でオッサンが聞き返す。

もう一度、福耳君は嬉しそうに大きく頷いた。

「気がかりなこと、済ませませんとね。成仏できませんから」

福耳君と色々話した後、階段を下りていくオッサンを見送ると、さゆりは溜息を一つつく。これで気がかりなことが一つ片付いたのだ。それで良しとしよう。自殺してしまう前に力になってあげられなかったのは残念だけれど、今更言ってもしょうがない。

「お疲れ様です。いや、正直、こんな事になるとは思いませんでした」

にこにこしているさゆりに、福耳君が嬉しそうに微笑みながらぺこりとお辞儀をする。

「いーえ、どういたしまして。単なるお節介だけどね。ところで

…」

ここでさゆりの表情が鬼のそれに変わる。そして、福耳君の耳を引っ張って大声で怒鳴った。

「どうしてあんな便利な物があるなら使わないのよっ!! 最初からアレ見せてりゃ済む事じゃない!!」

「いででーっ！ いや、だからっ！ それはそのっ！！ 本人がごつちの存在に気づいてくれないと、話が出来る段階にならないとどうにもならないんですよっ！！」

福耳君は涙目で両腕をばたばたさせながら必死で弁解する。

「なーんだ、そうなんだ」

さゆりが掴んでいた耳たぶをぱつと離すと、福耳君は痛そうに耳を押さえてうずくまっている。

「んじゃ、帰るわよ」

その福耳君の背中にさゆりは無情に声をかけた。

「えっ…？ はあ…」

福耳君は涙目のまま上目遣いでさゆりの方を見てキョトンとしている。

「何よ、また引っ張り足りないの？」

そう言いながら手を伸ばすと、

「はいいつ〜！ ごめんなさいーっ」

と、怯<sup>おび</sup>えた様子で立ち上がった。

ビルから出ると、さゆりは無言のまま歩幅を早めて自宅の方へ歩き出す。今までは見たことも無かったようなものがいろいろと見えているため、なるべくそちらに気を取られないようにしようとしたのだ。

「…あのー、…一つご質問してよろしいでしょうか？」

おどおどした様子で後に付いてきている福耳君が何かを言いかけるが、

「ダメ」

さゆりにびしゃりと言われてそのまま黙ってしまっ。

「…」

諦めたのか福耳君はそれ以上何も言わなかった。さゆりも無言のまますたすたと歩いていく。

そうして暫く行った先に、それはあった。

お地蔵さんだ。

「やつぱりあった…」

そう呟くさゆりに、

「はあ？」

と、キョトンとした様子で福耳君が聞き返す。

「何でもない。ただ、アンタのこれを見たら思い出しただけ」

と言って福耳君の耳たぶを引っ張る。

「いででーっ！」

それは、目の前の古ぼけたお地蔵さんの耳と本当によく似ていた。

「な、何かしました？ 僕？」

涙目の福耳君が恨めしそうに尋ねてくる。

「別に。似てるから」

「こ…」

さらりと言ったさゆりの答えに絶句している福耳君は無視して、

さゆりはお地蔵さんの前にしゃがみ込んで手を合わせた。

これに効果があるのかどうかは分からない。でも、周りの景色の中で、彷徨っている人が一人でも救われれば、と思ったのだ。

(…今までは見向きもなかったけど、もしかしたら誰か、やつぱり見える人が置いたのかな…)

風化して目鼻立ちがほとんど分からないほどになっているお地蔵さんは、ただ微笑んでいるだけのように見えた。

「さて、と」

暫くそうして手を合わせると、さゆりは立ち上がって福耳君の方に向き直る。

「な、何か…？」

怯えた様子でそう尋ねる福耳君。

「…何考えてんのよ。ちょっと聞きたいんだけどさ、これって何か御利益…というか、効果ってあるのかな？」

さゆりはお地蔵さんの方を振り返り、尋ねる。

「いや、それは…もしかしたらあるかもしれないですし、無いか



もしれないですし」

「何だか頼りない言い方ねえ…」

今に始まったことではないが、福耳君の言い方は何となく歯切れが悪い。

「…それを決めるのは他ならぬ生きている人たちなんですよ。例えば、あなたのように手を合わせて、彷徨っている霊が成仏できるよう祈ってくれる人が一人でもいればそれが力になります。逆に、ほつたらかされていれば空き家になって別の悪いものが入り込んだりもしますから」

そう答える福耳君はお地蔵さんを通してどこか遠くを見ているような感じだった。

一体、彼の目には何が見えているのだろうか…。

「これは平気？ 変なのが入っているとかいいうことはない？」

そんな福耳君に少し感心しつつ、さゆりは尋ねる。もしかしたら、結構、そっち関係はすごいのかもかもしれない。

「…大丈夫じゃないでしょうかねえ。少なくとも一人分の祈りは今、込められましたたわけです。それだけでも、ずいぶん力になるものなんですよ」

「そんなもんなの？」

そう言いながらすたすたと歩き出すさゆりの後を、福耳君もついて行く。

「はあ…多分…」

…やっぱり信用ならない。

ちよつとでも感心した自分がバカだったと後悔しつつ、ちよつと信号が青になったので横断歩道に踏み出す。そこへ、無理に交差点を抜けようとしたトラックが突っ込んできた。

「！！！」

避けなければ、と思うが、身体がすくんでしまっただけ動けない。そうしている間にもみるみるトラックが迫ってくる…。

ドンッ！！

衝撃をもろに食らってはじき飛ばされる。周りの景色がまるでスローモーションのようにゆっくりと流れていって

気が付くと、さゆりの足の先数センチの所に、トラックの大きなタイヤがあった。とっさに、福耳君が突き飛ばしてくれたおかげで助かったらしい。だが…。

「…ちよつと？ 福耳君？ どこ？」

答えはない。辺りを見回してみても、どこにも彼の姿はなかった。

「…まさか…」

ガクガク言っと思っように動かない身体を引きずるようにして、トラックの正面の方に回り込んで行く。

タイヤの間から手が見えた。

「…福耳君？」

呼びかけてみるが、ぴくりとも動かない。さゆりは一つ大きく深呼吸すると、トラックの下をのぞき込む。

と、そこには、ちよつとトラックのタイヤとタイヤの間に挟まるようにして、福耳君が倒れていた。

「…ん…っ…」

うめき声と共に手がぴくぴくと動く。  
は。

さゆりはがっくりとその場に頷れる。

「あ、あれ、大丈夫ですか？」

タイヤの間からもぞもぞとはい出してきた福耳君が、心配そうに声をかけてきた。

「一体何なのよあのトラック、まーったく、ムカつくったらありやしない！！ なってないんだからっ！」

「はあ、まあ…無事だったんだからいいじゃないですか」

一人息巻いているさゆりを福耳君がなだめた。先程のトラックは、福耳君が無事だと分かると『バカ野郎』の一言だけ残して行ってしまったのだ。もちろんさゆりは追いかけてはみたものの、トラック

のスピードにかなうわけもなく…というわけだ。

「良くないっ…！」

「…う、ごめんなさい」

ぴしゃりとさゆりに言われて、福耳君がしょんぼりして謝ってくる。

「別にアンタがそんな顔する必要ないでしょ」

「す、すみませ…あががーっ！」

また謝ろうとした福耳君の口の両端に、さゆりが指を突っ込んで広げる。

「んが、んが…」

「謝るなって言ってるの。全く、頼りないわねえ…」

そう言いながら指をはずす。福耳君は痛そうにしゃがみ込んでいる。さゆりは、その背中に向かって続けた。

「ところでさ、アタシ、これからどうしたらいいのかな？」

「はいい？」

キョトンとした表情で福耳君が振り返る。

「…アタシ、死んでるんでしょ？ ホントは。別に、隠さなくて

もいいよ

福耳君の動きが止まった。

そして、まじまじとさゆりを見つめている。さゆりが真剣な表情でその眼を見返していると、ややあつて福耳君が観念したような表情になってこくりと頷いた。

「…やっぱりね…」

さゆりは俯いてぼそりと呟いた。

「…いつから、気が付いていたんです？」

「…さつき。トラックに轢かれそうになった時にね。でもその前にも、ビルから落ちそうになった時にくるくる回る景色を見ていきなり、『これは前にも見たことがあるぞ』って思ったの。そして、色々思い出してきた」

呟くように言いながら、さゆりは側にあつた小石を軽く蹴飛ばす。

「…あなたは、三年ほど前の夏、一人暮らしをしていた長野からこちらに帰ってきました。そして、駅を出たところさつきみたいな感じでトラックに轢かれたんです」

福耳君はそこで一端言葉を切り、付け加えた。

「…即死でした」

「…そう。…だから、今まで気が付かなかったんだね…」

さゆりは、もう一度辺りをゆっくりと見渡す。広く、整備された道、建ち並ぶビル、そして、見たこともないような色とりどりの携帯電話を使う女子高生達。どうして気がつかなかったんだろう、と自分でも不思議に思えるほどだ。

「…三年か…だから、駅前も、みんなもこんなに変わってるわけだ…」

「はい…」

「喫茶店でも、どこでも、ホントはアタシ見えてなかったんでしょ？ 他の人には」

今度も福耳君は黙って頷いた。

「…お父さんやお母さんはどうしてる？」

「今も変わらずご自宅で暮らしておられます」

さゆりは長い長い溜息をつき、青い空を見上げる。何だかほっとしたような気分だった。次第に、雲がぼんやりとゆがんでいく…。

さゆりは空を見上げたまま、声を出さずに泣き続けていた。

暫く後、ずっと上を向いて泣いていたさゆりが、一つ大きな溜息をついた。それから、腕で顔をゴシゴシとこする。

「…ね、アタシ、これからどうすればいいのかな？」

さゆりはぼつりと呟くように尋ねる。もう、泣いてはいなかった。自分を哀れんだり、同情したりするのは趣味じゃない。むしろサバサバしたような、晴れ晴れとした気分でさえいた。

「…どのようにも。轢いた相手を取り殺すことも出来ずし、ご家族の元におられることも出来ず。そして、上に上がる…いわ

ゆる、成仏することも。あなたの望むままです」

「…じゃあ『生き返る』っていうのは？」

「そ、それは…」

あからさまにうるたえた様子の福耳君を見て、さゆりはぷつと吹き出した。

「大丈夫、言ってみたただけだから。死んじやったもんはしょうがないもんね。まあ、取り敢えず、家族に挨拶でもしてこようかな」

「…それはいいですね。きつと喜びますよ」

「どうかしらねー、ウチの家系、靈感とか全然無いから」

そう言つと、さゆりは自宅の方に向かって歩き始める。

「…そだ、ね、も一つ聞いていい？ アンタってホントは…」

暫く行つたところでさゆりが振り返り、尋ねた。

「…はい？」

福耳君が聞き返す。その、にこやかな笑顔と、お地蔵さんによく似た耳を暫く見ていたさゆりは、不意にふつと微笑むと、

「…やっぱいいや。じゃ」

と言つて手を振ると、再び歩き始めた。

(…誰かの力になればいいと思つて手を合わせたけど、まさか自分とはねえ…)

死んでしまったのは悲しいことだけど、悲しんでいても、恨んでいても、立ち止まつていても何にもならないから。

少なくとも、アタシはそう信じるから。

(…美人短命つて言うからねえ、やっぱアタシくらいになれば…)  
等と勝手に考えていたさゆりが、はたと立ち止まった。

そして、くるりと振り返る。

「っーか、何でアンタそこにいんのよ！… ついて来なきゃ、どうしていいんだかわかんないじゃない！…」

「はっ！？ はいいっ！…」

あわてて駆けてくる福耳君を見ながら、さゆりは

(なつてないっ！)

と、お決まりの台詞を心の中で呟いていた。

(後書き)

ご覧頂き有難う御座います。作者の山本です。

この作品は2002年に同人誌用に書かれたものでした。

5年前です(汗)。

そんなんばつかし…。

いや、一応新作も書いてることは書いているのですがものすごくスピードが遅いので同人誌用を書くだけでひーこら言っていたり…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2219c/>

---

私はこうして『見える人』になった～『生と死の狭間に』改題～

2010年10月17日02時44分発行